

奈良時代における千手観音の造像と役割

——平城京の事例に着目して——

矢内 悠葵

はじめに

千手観音への信仰が日本へ流入したのは、八世紀天平期の只中である。天平十三年（七四一）には、入唐僧玄昉によって、『千手千眼陀羅尼經』千巻が書写された^①。奈良時代における千手観音像の現存作例は、葛井寺千手観音像、唐招提寺千手観音像など、点数は少ないものの当時における一級品が多い。奈良時代の千手観音信仰に関する研究では、このような現存作例に対する分析を手がかりに、その実態を明らかにしようと試みられてきた。従来、奈良時代における千手観音は、空海請来以前の初期密教信仰と、それに付随する鎮護国家の役割と結びつけられてきた。

しかし奈良時代の千手観音像は現存作例が少なく、その信仰が実際にどのようなものだったのか不明な部分も多い。そこで本稿では、

奈良時代における平城京の千手観音像の現存作例、および文献または文字史料における千手観音像の造像例に着目し、それぞれの制作背景や役割を分析する。さらに、奈良時代当時の日本の社会情勢を鑑みながら、どのような役割が千手観音に求められていたのかを明らかにすることを目標とする。さらに、その検討を踏まえながら、平城京以外での造像にも分析を加えたい。

一・奈良時代平城京の千手観音像

(1) 千手観音像の現存作例

奈良時代平城京で造像された千手観音像として現存しているものは、①東大寺二月堂光背表面線刻、②唐招提寺金堂千手観音像である。以下、それぞれの像について、像と関連史料から読み取れるこ

とを検証していく。

① 東大寺二月堂光背表面線刻 (図1)

東大寺二月堂は、東大寺東側の山地に造立された堂舎である。この一帯はいわゆる東大寺前身寺院が存在していた上院地区と呼ばれる場所であり、天平期には二月堂のほか、千手堂、法華堂、阿弥陀堂も建立され、一つの伽藍を形成していた。天平十九年(七四七)九月に東大寺大仏の鑄造が始まる前、東大寺にはその前身寺院にあたる金鐘寺・福寿寺と呼ばれる寺院が存在していたことが知られているが、二月堂や法華堂は福寿寺を構成していた。²⁾ 二月堂は、『東大寺要録』では天平勝宝四年(七五二)の創建とされており、『正倉院文書』宝龜四年(七七三)正月「倉代西端雜物下用帳」(注:『大日本古文书』六卷四六五頁)に造東大寺司より緋端畳・純紺帳を十一面悔過衆僧座料として貸与するという旨が記載されていることから、八世紀後半には建立されていたことが推測される。

十一面観音像の光背は、表と裏にそれぞれ線刻画が描かれている。表面には千手観音像、裏面には蓮華藏世界図が見られる。寛文七年(一六六七)の火災により、いくつかの部分が欠けている。線刻画は中野敬子氏によってトレース図が作成されており、本稿において³⁾もこのトレース図(図2)を踏まえた上で論考を進める。

表面には、十一面千手観音を中心として多数の如来・菩薩・天部



図1 東大寺二月堂光背表面線刻
奈良国立博物館



図2 東大寺二月堂光背表面線刻
トレース図 中野敬子氏作図

形がそれを取り囲んでいる姿が見られる。光背最上部の三層には仏菩薩が並んで表されている。その下には化仏を収めた四角形の区画が並んでいる。化仏群の中央には、十一面千手観音像が中心に大きく表されており、その周辺部分に如来が並び、さらに下方、千手観音の左右に十四体の菩薩が描かれている。千手観音の足元より下には、合掌する人物が並び、さらにその下には天部形と力士風の人物

が描かれている。

裏面には、盧舍那仏を頂点とする層状の世界、すなわち蓮華藏世界が表されている。光背最上部には表面と同じく三層にわたって仏菩薩が並んでいる。最上部三層の下から光背下部まで、二十一層に分けられた天界が表され、一つ一つの層には菩薩の姿が描かれている。天界の下側には須弥山とそれを囲む海が表され、海の南側に浮かぶ瞻部州を大きく描き、瞻部州のすぐ下に釈迦三尊が描かれている。地上世界の下方は世界最下部である地獄が描かれている。蓮華藏世界は、東大寺大仏の蓮弁にも描かれている。特に、二月堂光背に描かれた瞻部州の図様は、大仏蓮弁線刻画に描かれているものと同じとしており、両者の繋がりが窺える。しかし蓮弁線刻画に描かれているように、二十五層の天界のうち上部三層を無文とはしていない。

蓮華藏世界において、菩薩は十の段階すなわち十地を上昇して悟りへと近づく。それに伴って菩薩は、その姿を閻浮提王、転輪聖王…とどのように変え最後に摩醯首羅天王となる。それと同様にその居場所も閻浮提、切利天…と変わり最後には色究竟天へと変わる。この移動は菩薩が地上から天へと上昇していくことである。⁽⁴⁾

稲本泰生氏は、二月堂光背の表面と裏面の図像を詳細に分析し、裏面が前提とする『梵網経』を最も重要な經典とし、大仏蓮弁と共通する世界観に基づく図像であることを指摘した。⁽⁵⁾ 一方の表面は『千

手眼観世音菩薩広大円満無礙大悲心陀羅尼経』(以下、『千手経』)を主要な所依經典とした、補陀落山における神変の場面であることを明らかにした。

二月堂光背が、蓮華藏世界と補陀落山とで表裏を構成している理由は後に検討するとして、ここでは、二月堂において大仏蓮弁と共通する世界観に基づいた図像が制作されたことに注意したい。

②唐招提寺千手観音像(図3)

唐招提寺金堂には、中央に盧舍那仏像、向かって左側に千手観音像、向かって右に薬師如来像が安置されている。盧舍那仏像は脱活乾漆造、千手観音像と薬師如来像は木心乾漆造である。盧舍那仏像は光背に千仏を表し、八重蓮華座の上に坐し、『梵網経』に説かれる蓮華藏世界の盧舍那仏を表していることが指摘されている。⁽⁶⁾ 千手観音像は千の小手を表しているほか、四十二の大手を表している。金堂は、天応元年(七八一)以降、鑑真の弟子である如宝が大同年(八〇六)に小僧都に就任するまでの間において建立されたと考えられている。⁽⁷⁾ 像の制作時期に関しては、盧舍那仏像のみ鑑真在世中に制作され、千手観音像が延暦年間の前半、薬師如来像が延暦十五年(七九六)頃に制作されたと考えられている。⁽⁸⁾

盧舍那仏像・千手観音像・薬師如来像を一具として安置する意図は、それぞれが天下三戒壇である東大寺・観世音寺・下野薬師寺の



図3 千手観音像 奈良・唐招提寺

本尊として対応させるためという指摘があるが、重ねて、鑑真の千手観音に対する信仰についても、幾度か言及されてきた。『唐大和上東征伝』（以下、『東征伝』）に「彫白栴檀千手像一軀。繡千手像一鋪¹⁰」とあることから、鑑真が二体の千手観音像を携えて来朝したことは広く知られているところである¹¹。このことから分かるように、鑑真が千手観音に対して何らかの信仰を抱いていたことは間違いない。同じく『東征伝』末尾には、「千臂経云。臨終端坐如入禅定。当知此人已入初地。」と鑑真臨終の場面で「千臂経」が登場している。この「千臂経」は、智通訳『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』、あるいは菩提流志訳『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経』を示すと

考えられている¹²。

『東征伝』の成立は宝亀十年（七七九）であり、金堂千手観音像制作と近い時期である。そうであれば、『東征伝』における「千臂経」とその功德に対する認識は金堂千手観音像制作においても存在していた可能性は極めて高い。

さらに、唐招提寺千手観音像には、『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』や『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経』だけでなく、『千手経』の内容も反映されている。千手観音の手による功德を、四十本に限定して記述しているのは『千手経』のみである。唐招提寺像のみならず、日本のほとんどの千手観音像は大手を四十二本で表すが、これは『千手経』に説かれている四十手のうち、宝鉢手と合掌手にそれぞれ二本の手を使用しているからである。つまり、唐招提寺像は、千手観音を持つ四十手の功德について説く『千手経』の影響か、あるいは『千手経』に基づいて制作された千手観音像の影響を受けて制作されたのである。

（2）史料に見える奈良時代の千手観音像の造像

奈良時代に平城京で造像された千手観音像について、文献に記載のある例として、①東大寺千手堂、②大安寺華嚴院、③東大寺西南院がある。東大寺千手堂や大安寺華嚴院については既に詳細な先行研究がある。以下、それぞれの像について、制作背景を整理するた

め、先行研究と史料をまとめていく。

①東大寺千手堂千手観音像

東大寺千手堂は現存していないが、その場所は天平勝宝六年（七五四）の「東大寺山堺四至図」や『扶索略記』、『七大寺巡礼私記』等で確認することができる。千手堂は大仏殿の北東、現在の手向山八幡宮と法華堂の中間の高地に西を向いて建てられていた。千手堂もまた、先に触れた二月堂と同じく福寿寺の伽藍を構成する堂宇であった。「東大寺山堺四至図」には絹索堂（法華堂）と千手堂しか描かれず、上院地区においてはこの二堂が主要な建物であったと思われる。

千手堂の史料上の初見は天平十九年（七四九）正月二十七日「大灌頂奉請注文」であり、この頃には建立されていたことが福山敏男氏によって明らかにされた¹⁴。千手堂に安置されていた仏像類は現存していないが、『東大寺要録』および『七大寺巡礼私記』によると、千手観音像のほかには銀製盧舎那仏像と屏風仏像三枚が置かれていたという。福山氏は『正倉院文書』所収「種々収納銭注文」の「合十三貫一百文良弁大徳奉納銀仏料」の「銀仏」が千手堂銀盧舎那仏像を指していると考え、千手堂と良弁の関係性を指摘した。堀池春峰氏は天平十八年十月に盧舎那仏像の燃燈供養を行った金鐘寺金堂こそが千手堂であり、銀盧舎那仏像は天平十二年（七四〇）以来行わ

れてきた『華嚴経』講説の本尊として造像されたと考えた¹⁶。千手堂と法華堂を金鐘寺とする堀池氏の意見に対しては一考の余地が残るが、華嚴教学と強い関係を持っていた良弁¹⁷が銀仏に奉納をしたことは重要な点である。また、児島大輔氏は、銀製の盧舎那仏像を説く経典が『不空絹索神変真言経』のみであることを指摘した¹⁸。

これらの点を踏まえると、千手堂千手観音像が『華嚴経』や『不空絹索神変真言経』と関係していたことは間違いない。千手観音像が『華嚴経』や『不空絹索神変真言経』とどのような関連を持っていたかについての考察は後述するとして、この三者の関係が天平十九年正月の時点で東大寺において確立されていた点に注意したい。

②大安寺華嚴院千手観音像

大安寺華嚴院に安置されていた千手観音像は現存こそしていないが、福山敏男氏と堀池春峰氏により詳細に研究されている¹⁹。福山氏は、『正倉院文書』の記録を検討することによって、大安寺華嚴院には高さ三丈の盧舎那仏像と、千手観音画像、不空絹索観音画像が安置されていたと想定した。以下、大安寺華嚴院についての福山氏と堀池氏の先行研究を紹介していく。

天平勝宝元年（七四九）閏五月十日始まりの「進送大安寺華嚴紙注文」によると、六月四日まで東大寺写経所から、麻紙三百卷あまりと表紙が大安寺に送られた。このうち「二十八日六卷^{1麻}」と

いう記述は、「華嚴院」に宛てられている天平勝宝元年閏五月二十八日「東大寺写経所牒」の「麻紙六卷（百部強一尺六寸麻紙）十九紙²¹」という記述と一致する。福山氏はこのことから、東大寺写経所が麻紙を送った先は華嚴院であり、この華嚴院が大安寺にあったことを突き止めた。これに加えて堀池氏は、「東大寺裝潢所紙進送文」の「進送大安寺写所所紙（中略）（市原王）蒙長官王宣称、為奉写花嚴經²²」という記述をもとに、大安寺に送られた麻紙が、市原王の宣による大安寺華嚴經書写に当てられたものであることを指摘した。

さらに、この出来事と同年の天平勝宝元年閏五月十一日の「大安寺造仏所解²³」によると、大安寺造仏所は東大寺に対して、大安寺盧舎那仏像に使用する白青・緑青・白緑などを請求している。以上の記録から、天平勝宝元年（七四九）閏五月以前に大安寺造仏所が設けられ、盧舎那仏像が造られていたこと、さらに『華嚴經』が書写されていたことが福山氏によって明らかにされた。

また「天平廿年八月以来上日帳²⁴」は、天平二十年八月から天平勝宝元年八月までの東大寺での上日（勤務日）を記載している。「上日帳」記載の阿刀酒主という人物は、閏五月の上日日が少なく、「大寺より餘り²⁵」と記されていることから、酒主は閏五月の多くは大安寺にいたことがわかる。さらに福山氏は、割注の「高さ三丈の盧舎那仏像」について、東大寺には高さ三丈の盧舎那仏像は存在しないため、大安寺の盧舎那仏像であることを想定した。また「一舗」と

いう数え方や、大安寺造仏所が先述の「大安寺造仏所解」で顔料を請求していたことから、この盧舎那仏像は画像であったことも指摘している。

さらに、同書の志斐万呂の項目にある高さ一丈五尺の「千手菩薩一輔・不空菩薩一輔」に関しても、この盧舎那仏像と同時に、おそらくその両脇侍として描かれた画像であったと福山氏は想定している。すなわち福山氏に依れば、大安寺華嚴院には天平勝宝元年閏五月から六月ごろに盧舎那仏・千手観音・不空羅索観音で三尊構成をなす絵画が置かれたということになる。

ここまで、福山氏と堀池氏の先行研究を元に、大安寺華嚴院における千手観音像の制作についてまとめた。盧舎那仏像と千手観音像を共に安置している点は東大寺千手堂と共通している。一方で、大安寺華嚴院ではこれに不空羅索観音像も加えている。この三尊がどのような関係性を持ち、なぜ三尊を構成していたのかという問題が、奈良時代の平城京における千手観音を考える上で重要な要素となってくる。

③東大寺西南院千手観音像

西南院千手観音像についての記録は、嘉承元年（一一〇六）成立『東大寺要録』所引の「弘法大師御遺告」に見ることができ、『要録』の記載によれば、西南院は岩淵僧正の弟子が勅命によって大安

寺から東大寺に移り、建立したという。⁽²⁶⁾

その西南院には、丈六金色の釈迦如来像、薬師如来像、千手観音像等が安置されていた。これらの像の発願は天平神護年間、「女親王藤原貞子」なる人物によって鎮護国家のためになされたとある。天平神護中にこの「女親王藤原貞子」が存在したという記録は他に無いが、「藤原」という姓から藤原不比等の娘である光明皇后と、聖武天皇の間に生まれた阿部内親王（孝謙天皇）のことを示す可能性はある。ただし、『要録』の「天平神護」という時代設定は岩淵僧正の生きる時代とやわずれており、この記述がどこまで真実を伝えているか断定することはできない。

岩淵僧正とは、天平勝宝元年（七四九）から天長五年（八二八）に大安寺を中心に活動した、空海の師とされている勤操のことである。⁽²⁷⁾西南院諸像の建立状況に疑問が残るところではあるが、ともあれ西南院造立に空海の師である勤操が関与したと十二世紀初頭には考えられていたことに注目したい。

二 奈良時代平城京における千手観音像の役割

ここまで、千手観音像の現存作例、及び史料の記載について取り上げてきた。これらの造像例に注目すると、いくつかの特徴が目につく。

一点目は、東大寺千手堂千手観音像が、銀を素材として制作されている銀仏と共に安置されているように、「銀」と関係している点である。銀仏の造像は十世紀以降になると薬師如来像や阿弥陀如来像などが増えていくが、九世紀以前においては盧舎那仏像や釈迦如来像の方が多い。⁽²⁸⁾そして二点目は、盧舎那仏像、あるいは釈迦如来像と共に安置されている作例が見られる点である。そこで次に、この二つの特徴から、千手観音の役割を考察していく。

(1) 銀仏と観音像の関係

東大寺千手堂千手観音像は、銀製の盧舎那仏像と共に安置されていた。ここで、「銀」という素材に着目すると、千手観音像の他にも「銀」と関係のある不空羅索観音像の作例がいくつか存在していることに思い当たる。

現存作例としては、東大寺千手堂の横に建立されていた法華堂の不空羅索観音像が挙げられる。この像は像高三六二・〇センチメートルの巨像でありながらも、均整のとれたプロポーシオンや細部まで丁寧彫られた着衣など、優れた出来栄を見せる八世紀の脱活乾漆像である。

この像の宝冠は、唐草紋様からなる基部に、翡翠・琥珀・水晶・真珠・吸玉などから作られた勾玉・管玉・切子玉・小玉などの装飾が施されている（図4）。各部には立体で大型の蓮華が付属し、中



図4 不空羂索観音像宝冠 奈良・東大寺

心から放射状に光が放たれている様が表されている。宝冠の正面には化仏が置かれているが、この化仏は銀製である。法華堂不空羂索観音像の宝冠に銀仏が取り付けられている理由については、『不空羂索神変真言経』で「毘盧遮那如来、身檀金色或白銀色、結加趺坐、身上溥放金色光焰、或白色光」と、盧舎那仏の身色を「白銀」と説明していることに由来していると説がある。『梵網経』や『華嚴経』では釈迦如来が盧舎那仏の化身であることが説明されており、宝冠化仏も盧舎那仏の化身としての釈迦如来であるという解釈が可能なのである。その理由は、法華堂不空羂索観音像が『華嚴経』の十地思想と関係していることにある。この関係性については、既に

先行研究で指摘されているので、その概要をまとめていく。

不空羂索観音像の持つ性質について、浅井和春氏は『華嚴経』「十地品」との関連を指摘した。³¹⁾「十地品」は菩薩の修行段階を初地、第二地、第三地……というように十に分け、それぞれ歡喜地、離垢地、發光地……と名付けている。菩薩はこの段階を上昇するに従ってその姿を變じるのだが、浅井和春氏はそのうち第十地、すなわち法雲地の菩薩が摩醯首羅天（大自在天）になることに注目した。浅井氏はさらに、不空羂索観音の關係経典では不空羂索観音の姿が摩醯首羅天に似ると記述されること、『大智度論』で説かれる三目八臂の摩醯首羅天の姿が法華堂の不空羂索観音像と共通していることを指摘し、ここに不空羂索観音像と『華嚴経』「十地品」との関連性を見出した。これを受けて長岡龍作氏は、『不空羂索神変真言経』に説かれる不空羂索観音の基盤には「天を化導する」という役割があることに注目し、不空羂索観音像が十地の階梯を昇る諸菩薩を導く観音として造像されたと結論づけた。³²⁾このように、東大寺法華堂不空羂索観音像は『華嚴経』「十地品」の思想に基づいていると考えられている。

二つ目の銀に関わる作例は、九世紀のものになるが、『安祥寺資財帳』に存在を確認することができる。安祥寺は嘉祥元年（八四八）、仁明天皇女御（文徳天皇母）藤原順子の帰依を受けて、恵運によって創建された。安祥寺には恵運が請来したと伝えられる五智如来像

が残されている。そのほか、貞観九年（八六七）成立の『安祥寺資財帳』によると、安祥寺には毘盧遮那如来像、六臂不空絹索観音像、釈迦如来像二軀、脇侍像二軀が安置されていたという。これらの像はいずれも「太皇太后」すなわち藤原順子の発願によるものであり、「純銀」で作られていた。³³この例では、不空絹索観音像そのものが銀でできており、その上ともに安置されている盧舎那仏像や釈迦如来像も銀製である。銀製の盧舎那仏像が共に安置されているという点は、東大寺千手堂と共通している。

このように、不空絹索観音像もまた東大寺千手堂千手観音像と同様に、銀仏と関係のある観音としてしばしば制作されていた。ここから、「銀」という要素を介して、不空絹索観音と千手観音が何らかの共通点を持っていることが窺える。さらに、不空絹索観音像は盧舎那仏と関連する文脈において、銀仏と共に制作されていた。このことは、本章冒頭で述べた奈良時代千手観音像の特徴の一つである「盧舎那仏像、あるいは釈迦如来像と安置されている作例が見られる」ということと関係してくる。それでは続いて、千手観音像と盧舎那仏像の関係について、検討していきたい。

（2）千手観音と十地思想

千手観音と盧舎那仏の関係性がどのようなものであるか、千手堂の事例のみでは、史料に乏しく判断が難しい。そこで、千手堂と同

じく上院地区に建立された東大寺二月堂光背の図像の意味について検証していく。前章で触れた通り、光背の表面には千手観音を中心として仏菩薩や天が取り囲み、裏面には層状の蓮華蔵世界が表さされている。千手観音がいる補陀落山と蓮華蔵世界が、表裏の関係であるということは、この二つに何らかの繋がりがあるということである。稲本氏が指摘したように、表面が補陀落山における神変の場面であれば、二つの世界が表裏に描かれる理由が浮かんでくる。

千手観音が補陀落山で起こす神変の場面は、『千手経』に詳しく描写されている。その場面は、千手観音が補陀落山の道場で大悲心陀羅尼を唱える場面である。『千手経』には「大地六変震動、天雨宝華繽紛而下、十方諸仏悉皆歡喜、天魔外道恐怖毛豎、一切衆会皆獲果証、或得須陀洹果、或得斯陀含果、或得阿那含果、或得阿羅漢果者、或得一地二地三地四地五地、乃至十地者、無量衆生發菩提心」³⁴と記述されており、内容を記すと以下ようになる。千手観音は「諸衆生に安樂を得さしめんが故」³⁵と目的を述べた上で千手陀羅尼を唱えた。するとすぐに、大地は六種に震動し、天より宝華が降り、十方の諸仏はことごとく歡喜し、一切衆会は皆果証を得た。皆は須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果³⁶を得て、一地、二地、三地、四地、五地、そして十地へと至り、菩提心を發した。³⁷すなわち、『千手経』における神変の場面とは、千手陀羅尼を唱えたことによつてその場の一切衆会が十地へと至った場面なのである。

『千手経』にはこれと似たような場面がもう一つ登場する。それは千手観音が過去に発願をし、千手千眼を具足した場面である。遠い昔、千光王静住如来は大悲心陀羅尼を説き、「この神呪を保ち、あまねく未来悪世の一切衆生のために大きな利益と安楽をもたらさない」と言い、千手観音を摩頂した。千手観音はそのとき初めて初地に到達し、さらに一度大悲心陀羅尼を聞いただけで、第八地を越えた。ここで千手観音は「もし私が一切衆生に利益と安楽をもたらすなら、身に千手千眼を備えさせてください」と発願した。するとすぐにその身に千手千眼が具足し、十方の大地が六種に震動し、十方の千仏は光明を放ち、千手観音の身と十方の世界を照らした。この場面でも千手陀羅尼を説き、あるいは聞いたことで十地を上昇し、神変が発生した。

このように、『千手経』においては、千手陀羅尼を唱えることによつて神変が起こり、十地の階梯を進んでいくという効果が見られる。無論、『千手経』における「十地」が、『華嚴経』における十地を示すかどうかは、『千手経』を読んだだけでは断定することができない。しかし、二月堂光背に描かれる「神変」の場面が、蓮華藏世界と表裏を構成している以上、少なくとも二月堂光背制作においては、『千手経』に登場する「十地」が、『華嚴経』の十地と理解されていたと言える。このように、二月堂光背には『千手経』に基づいた千手観音と十地の関係が見られるが、『千手経』以外の文脈においても、

その関係がしばしば指摘されている。

一つ目は、『不空罽索神変真言経』巻第二十八「清淨蓮華明王品第六十七」の記述である。⁽³⁸⁾ここでは、清淨蓮華明王央俱捨真言によつて修行者が見る七つの夢が説かれている。この夢のうち第六夢において、修行者は千手観音の曼荼羅を見る。また第七夢では、菩提樹下の金剛座にて毘盧舍那如来から摩頂される。毘盧舍那如来からの摩頂すなわち授記に至る過程において、千手観音との出会いが発生するのである。

もう一つは、慧沼訳『十一面神呪心経義疏』に「千手千眼大自在王十一面觀自在菩薩」という観音について、大自在天の身を表すことができる⁽³⁹⁾と説明されていることである。すでに述べた通り、三目八臂の不空罽索観音は、十地における菩薩の姿、すなわち梵天（不動地）や大自在天（法雲地）に似るとされている。

不空罽索観音と同様に、千手観音もまた大自在天としばしば同一視されていたことが指摘されている。⁽⁴⁰⁾『十一面神呪心経義疏』に「千手千眼大自在王十一面觀自在菩薩。此の菩薩或いは大自在天の身を現す故に此の身を現すなり」と記されるように、千手観音も不空罽索観音と同様、大自在天へとその姿を変えると理解されていたのである。

『東大寺要録』所収の「大仏殿西曼荼羅東縁銘文」（天平勝宝九歳成立）には「或現一十一面或現千手千眼乃名觀自在乃名觀世音又稱

馬頭又稱不空羂索⁴²』と、観音が十一面、千手、不空羂索と様々な姿に変わると記載されている。草創期東大寺において法華堂不空羂索観音像だけでなく、千手堂千手観音像、二月堂十一面観音像と、様々な種類の観音像が制作されたのはこの理解に基づいているとの指摘がある⁴³。すなわち、当時の東大寺において千手観音が不空羂索観音と同様の役割を果たすと理解されていたとも言えるのである。

そうであれば、法華堂や二月堂と同じ上院地区に置かれていた千手堂の千手観音像についても、同様の関係性があると見るべきである。再三触れているように、千手堂には千手観音像と共に銀製の盧舎那仏像が安置されていた。二(1)(2)で触れた通り、これは『華嚴経』と『不空羂索神変真言経』を典拠とすることは間違いない。となれば、千手堂諸像は『華嚴経』、『不空羂索神変真言経』、『千手経』に基づいている。この三つの經典が結びつくのは、まさしく華嚴教学の十地思想が根底にあるからである。すなわち、東大寺法華堂、千手堂、二月堂には、十地思想と結びついた観音がそれぞれ安置されていた。華嚴経学の中心であった東大寺上院地区においては観音と十地という関係性が確立していたのである。

さらにこの関係性は、上院地区の外にも及んでいた。大安寺華嚴院に、盧舎那仏を中尊として千手観音と不空羂索観音を三尊として安置していたことがその証拠である。この三尊は絵画であり、銀を使用していた訳ではない。しかし東大寺上院地区において不空羂索

観音と千手観音を結びつける理解があった以上、東大寺と同じく華嚴教学の拠点であった大安寺においても、同様の理解のもとに三幅が制作された可能性は高い。

その可能性に対する裏付けとして、大安寺の三幅が制作された当時の時代背景について触れたい。

大安寺の三幅が完成した天平感宝元年(七四九)は、聖武天皇が盧舎那仏に対して特に強い関心を持っていた時期であることが、『続日本紀』に細かく記載されている。まず改元前の天平二十一年(七四九)四月一日、聖武天皇は光明皇后及び阿部内親王らと共に東大寺の「盧舎那仏像前殿」に参った。さらに同月十四日には、再び東大寺の「盧舎那仏像前殿」に参り、「天平」から「天平感宝」に改元している。二ヶ月後の閏五月二十五日には、勅を發して大安寺・薬師寺・元興寺・興福寺・東大寺・法隆寺・弘福寺(川原寺)・四天王寺・崇福寺・新薬師寺・建興寺・法華寺に土地や綿布、絁を寄進した。この時の勅願文には「花嚴経を以て本と為す」とあり、『華嚴経』を重視する姿勢が記されている。この後七月になって聖武天皇は阿部内親王に譲位し、元号が「天平勝宝」へと改められる。

堀池春峰氏は大安寺華嚴院の創建が東大寺盧舎那大仏造像とほぼ同時期であること、大安寺が天平十二年(七四〇)に法華堂で行われた華嚴経講説の講師を勤めた僧審祥を輩出した寺院であることから、大安寺が日本における華嚴宗草創において重要な位置を占めて

いたと考えた⁽⁴⁴⁾。そのため天平感宝元年頃の大安寺は、東大寺における華嚴教学と大きく関わっていたと考えられる。

これに加えて堀池氏が指摘するように、三幅画像の制作と同時に『華嚴経』書写も行われている。このように、天平二十一年四月から閏五月は聖武天皇の盧舎那仏に対する関心が高まっていた時期だった。そのような最中に大安寺華嚴院の三幅画像が東大寺司の人手によって制作されたこと、造像に際しての華嚴経書写に律令機関の長官である「玄蕃頭市原王」⁽⁴⁵⁾の宣が出されたことを踏まえると、この造像と書写は国家的事業であった可能性が高い。そうであれば、この事業に関わった可能性のある人物として聖武天皇や光明皇后が挙げられる。そのため、天平感宝元年制作の大安寺盧舎那仏像・不空羅索観音像・千手観音像の三幅対も、東大寺における観音と十地の理解に基づいていたと言えるのである。それと同時に、少なくとも天平感宝元年にはこの理解が東大寺周辺において確立していたことも分かる。

千手観音と『華嚴経』についてこのような理解があったことを踏まえると、唐招提寺千手観音像もまた同様の理解に基づくと考えられる。唐招提寺像と十地思想との関係は、すでに多く指摘されている。すなわち、『東征伝』の鑑真臨終の場面で、「千臂経云。臨終端坐如入禪定。当知此人已入初地」⁽⁴⁶⁾とあるのは、智通訳『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』、あるいは菩提流志訳『千手千眼観世音菩

薩陀羅尼身経』を引用したものである⁽⁴⁷⁾。

さらに『七大寺巡礼私記』「招提寺」条では「或記云、和尙是第二地菩薩也、於大唐大福光寺為衆説法之時、自言我現異相、即現三目六臂不空索觀音之像⁽⁴⁸⁾、」とあり、遅くとも『巡礼私記』の書かれた十二世紀までに成立した「或記」に、鑑真が「第二地」に到達したことが記されていたことが分かる。鑑真が至った階梯を「第二地」としたことも、『東征伝』中の「千臂経」が離垢地への到達を説く『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』や『姥陀羅尼身経』に比定される傍証となる。さらに『七大寺巡礼私記』では続けて、鑑真が三面六臂の不空羅索観音の像を現したことが述べられている。長岡龍作氏はこのことについて、十地の菩薩が不空羅索観音の姿であると理解する向きがあったことや、そう見なす際には臂数にも意味があったことの可能性を指摘した⁽⁴⁹⁾。ここでも、十地と観音を結びつける文脈が窺える。

これまで触れてきた千手観音と十地の関係性をまとめると、東大寺千手堂、東大寺二月堂、大安寺華嚴院、唐招提寺と、平城京の寺院における千手観音像は、明らかに盧舎那仏、あるいは蓮華藏世界との関係が見られる。

法華堂不空羅索観音像の宝冠化仏は当初のものではなく、Y字型の衣文表現から、鑑真来朝以後に取り付けられたものであるという指摘がある⁽⁵⁰⁾。また、東大寺千手堂の銀盧舎那仏像は千手堂が建立さ

れた天平十二年（七四〇）から安置されたのではなく、その五年後以内に客仏として安置されたという指摘もなされている。⁽⁵¹⁾

時系列にまとめると、天平十二年（七四〇）以降に東大寺千手堂が建立され、その数年後に銀盧舎那仏像が客仏として安置された。天平感宝元年（七四九）には、大安寺で千手観音・不空罽索観音・盧舎那仏の三幅画像が制作された。さらに、鑑真来朝後には、東大寺法華堂の不空罽索観音像宝冠に銀製の釈迦如来像が取り付けられた。観音と十地を結びつける理解は、上院地区が整備された当初以降、次第に整っていったようだ。八世紀半ばから後半にかけて、東大寺と大安寺において観音と盧舎那仏を関係づける動きがあったのである。

鑑真による千手観音信仰が反映されたと見られる唐招提寺像を東大寺千手堂像と直接関連付けることは難しいかもしれないが、唐招提寺像には『東征伝』記載の「千臂経」だけでなく、八世紀の日本において流布した『千手経』の内容も反映されている。千手堂盧舎那仏像の建立に関わった聖武天皇⁽⁵²⁾に授戒した鑑真の寺である唐招提寺が、当時の平城京における千手観音信仰の影響を全く受けなかったとは考えにくい。千手観音を『華嚴経』と関連づける思想が唐招提寺にも及んでいたとしたら、その思想は東大寺、大安寺、唐招提寺と、平城京の各寺院に広まっていたと言える。

三、八〜九世紀の千手観音の造像

(1) 平城京以外の奈良時代の千手観音像

平城京以外の奈良時代に遡る現存する千手観音像としては、①葛井寺千手観音像、②道成寺千手観音像、③大谷寺千手観音像が知られ、史料に伝えられる像として、④壺阪寺（南法華寺）千手観音像が挙げられる。次にはこれらの像の役割について検討を加える。

① 葛井寺千手観音像（図5）

葛井寺千手観音像は、本体を脱活乾漆で作り、木造の小手を表す千手観音像である。頭上に十一面を有し、千の小手を表し、さらに小手を含めた一本一本の掌に眼を描く。現在小手は九五一本を残すのみだが、当初は千本の小手があったとされる。⁽⁵³⁾ 抑揚の少ない身体表現や目鼻立ちが東大寺法華堂の伝日光菩薩像・月光菩薩像と類似していることが指摘されているほか、⁽⁵⁴⁾ その胸飾の文様について東大寺法華堂不空罽索観音像との類似が指摘されている。⁽⁵⁵⁾ 緩やかで流麗な衣文線と、やや細身ながらも写実に富んだ身体表現など、優れた作風が見られ、官营造仏所が制作に関わっている可能性も考えられる。⁽⁵⁶⁾ その一方で、頭部が小さく、体躯も細身であるという特徴は法



図5 千手観音像 大阪・葛井寺

華堂諸像と異なっている⁵⁷⁾。また、日本における千手観音像は腹前で結んだ定印の上に宝鉢を置いて宝鉢手とすることが通例だが、本像は腹前で定印を表さない。このように腹前で定印を結ばない千手観音像は時代を問わず中国に散見され、盛唐までの作例でいえば四川省丹棱劉嘴第四十五号龕千手観音像（八世紀中頃後半）⁵⁸⁾がその例として挙げられている。葛井寺像が定印を表さない理由に関しては、四十手の像容を説く『千手経』の内容を忠実に再現しているとする説⁵⁹⁾、四川省丹棱劉嘴第四十五号龕像の影響を受けている説⁶⁰⁾が提示されているが、九世紀以降の日本における千手観音像は小手を表さず、

腹前に定印を結んで宝鉢手とする姿が一般的であることを踏まえると、葛井寺像はそうした千手観音の像容が日本で形成されつつある過程で制作されたことが想定される。『千手経』の内容を再現している点や、四川省丹棱劉嘴第四十五号龕像からの影響という点も、そうした事情のもとに成り立っているのではないかと思われる。

本像が安置された葛井寺は、現在の大阪府藤井市、当時の河内国に位置している。近藤暁子氏は当時の河内が文化・政治の面から中央にとって重要な地域だったこと、葛井寺創建に関わった葛井氏が聖武天皇や光明皇后と近い関係にあったことなどを指摘し、葛井寺像が聖武天皇や光明皇后の意向を受け、鎮護国家的性格を期待して発願されたと考えている⁶¹⁾。

②道成寺千手観音像（図6）

道成寺は和歌山県日高郡、日高川の河口付近に位置している。この千手観音像は、昭和六十二年（一九七八）の修復時の調査にて、現在本堂の後戸に安置されている秘仏千手観音像の胎内から発見された。発見当時は顔から胸にかけて前面が大きく朽損していたが、近年の調査によって朽損部分が復元され、現在は道成寺本堂に安置されている。楠の一材から彫出されているが、裳裾の先端部分など、部分的に乾漆が使用されており、体部に大きく穴があるのは、朽損によるものではなく霊木を使用したことによると考えられている⁶²⁾。



図6 千手観音像 和歌山・道成寺

この像に関する史料は残っていないが、道成寺本堂跡から出土した均整軒平瓦が平城京より出土した瓦と近い文様を残していることから、当時の道成寺が平城京からの影響を受けていたと見る意見もある⁽⁶³⁾。一方で肩幅を広めにとり、身体のラインを腰に向かって窄ませていく表現は、同じく和歌山県内の円満寺十一面観音像（八世紀）にも見られる特徴であり、在地性も一つの特徴として読み取れる。

なお、道成寺にはさらにもう一軀の千手観音像が安置されている。この像は九世紀後半の作と見られるが、日光菩薩像・月光菩薩像と共に三尊を構成するという、他に類を見ない方法で安置されている。月光菩薩像の特徴や制作時期に関しては問題点も指摘されているが、少なくとも千手観音像と日光菩薩像は一具として作られたと見

て問題なく、またその出来栄も、当時の都の像にも匹敵する非常に優れたものである。このように道成寺は、八世紀後半の時点で千手観音信仰が存在し、その思想が九世紀以降も受け継がれていたのである。

③大谷寺千手観音像（図7）

大谷磨崖仏は栃木県宇都宮市にある姿川東岸の丘陵麓部に位置する磨崖仏群である。第一龕には四メートル近い千手観音像を刻出し、これより北側の龕二箇所には釈迦三尊像と阿弥陀三尊像をそれぞれ彫出する。北側二龕の間には下方に小龕をうがち、中に薬師三尊像を表す。現在はいずれも塑土および粘土によって塑形仕上げが施されている。

千手観音像は山型の宝冠に、条帛、天衣、裳を着用し直立する。腕は大型の脇手四十二手と小型の脇手を表す。小脇手は塑土のみで表し、他の部分にも塑土を三重、四重に塗り重ねるが、これらの塑土は大部分が後世の補修である⁽⁶⁴⁾。胸の一部や腰帯には当初の漆箔が残されている⁽⁶⁵⁾。四龕のうちでは最も古い像であり、造像時期は八世紀末〜九世紀初頭との見方が多い。大谷磨崖仏の造像に関する有力な文献史料は無いが、鑑真の弟子である如宝が関係している説と、如宝から戒を授かった勝道が関係している説が唱えられている⁽⁶⁶⁾。『東大寺要録』所収の「戒和上次第」には、如宝と下野薬師寺の関係が



図7 千手観音像 栃木・大谷寺

示されており、『律苑僧宝伝』や『招提千歳伝記』には、如宝が下野薬師寺に住持していた旨が記されている。一方の勝道は、下野薬師寺で受戒し、その後日光を開山していたことが『補陀落山建立修行日記』⁶⁷から分かる。これらの記述から、如宝か勝道のいずれが関わっていたにせよ、大谷寺が下野薬師寺を通して中央と繋がっていたという指摘もなされている。⁶⁸鑑真の流れを組む如宝や勝道によって造像されたのなら、大谷磨崖仏は鑑真の思想のもとに制作された可能性もあり、ひいては同じく鑑真の信仰のもと制作された唐招提寺千手観音像とその思想を同じくしていた可能性も否定できない。

④壺阪寺（南法華寺）千手観音像

奈良県高取山に位置する壺坂寺こと南法華寺は、伽藍から白鳳末期の瓦などが出土しており、創建は奈良時代以前に遡る。

『続日本後紀』承和十四年（八四七）十二月二十一日条には「勅大和国城上郡長谷寺、高市郡壺坂山寺、元来靈驗之蘭若也、宜付所由編為定額永以官長令檢校也」、⁶⁹『日本三代実録』仁和元年（八八五）十月三日条には「大和国靈驗山寺。有長谷壺坂両精舎」とあり、九世紀半ばには既に長谷寺と並んで大和国で第一の霊場として知られていたことが分かる。『続日本後紀』によると承和十四年十二月には長谷寺とともに定額寺に付されており、朝廷から庇護を受けていたと見受けられる。

壺阪寺と長谷寺は、稜線が両側に広がる地の中央に本堂を安置する形で建立されている。加えて、長谷寺の東側には大和川が流れており、壺阪寺は周辺の地形図に川が確認でき、宝永二年（一七〇五）の『円通記』にも周囲に川が流れていたことが記載されている。このように、両者は山水に囲まれた地形に建立されていることが特徴だが、この地形は中国伝来の風水思想に基づいて選ばれた土地であることを表しており、この場所が靈験の起きる勝地と見なされていたという指摘がなされている。⁷¹この場所で期待された靈験がどのようなものかは、九世紀後半成立の『日本感靈録』（以下、『感靈録』）に記されている。

『感靈録』は元興寺僧義昭の編纂であるが、完本は散逸し、現存するものは本文に欠落の著しい抄本（高山寺旧蔵、阪本竜門文庫現蔵）の十五話と『東大寺要録』『南法華寺古老伝』（以下、『古老伝』）所引の佚文各一話の計十七話のみである。壺阪寺の説話は、このうち建暦元年（一一二一）の『古老伝』に引用されている。『古老伝』の引用元である『感靈録』原典を確認することはできないが、『古老伝』の信憑性について検討した達日出典氏によれば、『古老伝』は現存する壺坂寺関係の史料中で最も成立年代が古く、記事も正確であり、出典も明らかにしているため、信憑性が高いという。⁷² 達氏の検討を踏まえて、本稿でも『古老伝』に引用される『感靈録』の信憑性を認めることとした。

さて『古老伝』所引の『感靈録』の内容を簡単に記すと、盲目の私度僧長仁が弘仁年中壺阪寺に住み、長年千手陀羅尼を誦し「日精摩尼手明眼大悲観自在菩薩」と千手観音の名号を称賛したところ、遂にその目が開いたというものである。壺阪寺は現代においても眼病封じの信仰を持つが、そのルーツは九世紀後半の『感靈録』に求めることができる。⁷³ 千手陀羅尼を唱えたことよって目が見えるようになったというのは、『感靈録』に書かれる通り、『千手経』で説かれる千手観音の四十手のうちの一手、日精摩尼手による功德である。⁷⁴ 以上の点を踏まえて『感靈録』から読み取れる、壺阪寺という霊場で期待された霊験とは、千手観音に対する陀羅尼誦持の結果、

千手観音が応えてその功德をもたらすということである。そして『感靈録』によるとその功德は『千手経』が説く日精摩尼手の効果であり、九世紀後半の時点で壺阪寺におけるこの構造が成立していたのである。

ただし、長谷寺とともに定額寺に付せられたという『続日本紀』の記述から、壺阪寺が霊場として国家的な祈願を担っていた可能性は高いが、千手観音に対する祈りの結果眼病が快復したという功德は、極めて個人的なものであり、壺阪寺が創建された八世紀前半においても、このような信仰が行われていたかということに関しては甚だ疑問である。また『古老伝』に登場する壺阪寺の垂迹神滝蔵権現が長谷寺と同名の垂迹神である点からも、壺阪寺が長谷寺と同じような信仰を担っていたと思われる。

現在千手観音像が安置されている八角円堂は江戸時代に再建されたものであるが、貞享二年（一一二三）頃の成立とされる『寺門高僧記』巻第六所引の「応保元年（一一六一）正月三十三所巡礼則記之」には「御堂八角五間南向。本尊丈六千手」とあり、十二、十三世紀には千手観音像を八角円堂に安置していたと思われる。東大寺法華堂不空羂索観音像の例からも分かるように、八角の場に観音像を置くことの背景には、補陀落山八角宝殿にいる観音という意識が、少なくとも八世紀半ばには存在していた。⁷⁶ 壺阪寺千手観音像がいつの段階で八角円堂に安置されたのかを知ることができないが、奈良

時代以来の、補陀落山にいる観音という意識が壺阪寺像に向いていた可能性もある。

これらの葛井寺、壺阪寺、道成寺、大谷寺、壺阪寺の千手観音像に関しては、十地思想と繋がっていたと断定することはできない。

葛井寺像の表現に東大寺法華堂諸像と類似している傾向が認められる点から、東大寺法華堂と葛井寺に何らかの接点があったことは考えられる。また、『古老伝』には壺阪寺に観音像と共に執金剛神像を安置していたことが記されており、後戸に執金剛神像を安置していた東大寺法華堂との関わりを窺わせる⁷⁾。しかし、葛井寺や壺阪寺には、東大寺や大安寺、唐招提寺に安置されていた盧舎那仏像あるいは釈迦如来像は見当たらず、『華嚴経』や盧舎那仏と関わりを持つ観音としての千手観音という考え方がこの二寺にもたらされていたかという問題に関しては、未だ再考の余地が残る。

一方で、道成寺像については、八世紀後半の釈迦如来像のものと見られる仏手が現存している。この釈迦如来像が、盧舎那仏の化身としての釈迦如来として作られていた可能性はある。八世紀後半の道成寺からは、平城京出土と同範の均整軒平瓦が出土していることから、平城京で流布していた信仰が伝えられていたと考えられる。

大谷寺像に関しては、鑑真的流れを組む如宝や勝道が造像に関わっていたならば、唐招提寺千手観音像の思想を受け継いでいたと思われる。すなわち、『千手経』、『千眼千臂観世音菩薩陀羅尼神呪経』

または『千手千眼観世音菩薩姥陀羅尼身経』を基とし、『東征伝』に記載されているように、初地ひいては十地への到達を重視する思想が、大谷寺像にも反映されていた可能性がある。

しかし、これら平城京外の千手観音像が『華嚴経』と関係して制作されたことを直接示す作例や史料は無い。いずれの作例も、作風や制作背景などから平城京内の作例との繋がりがあったことが窺える。その一方で、『華嚴経』との関係性までもが地方に伝わったのか、あるいは、千手観音信仰が地方に伝播する過程で『華嚴経』との関係性は変容していったのか、一つ一つの造像作例を精査した上で判断する必要がある。また、千手観音像だけでなく、不空罽索観音像に関しても、十地との関係性が平城京外にどこまで及んでいたか、今後明らかにする必要がある。天平十八年(七四六)に建立された福岡・観世音寺には、塑像の不空罽索観音の心木と残欠が残されている。さらに、現存してはいないものの『図像抄』には岡寺の不空罽索観音像について、東大寺法華堂像と同じ三目八臂の像だったことが記されている。これらの不空罽索観音像が、平城京と同じく十地との関係性のもとに造像されたのか、その実態や分布を明らかにすることが、奈良時代における観音信仰がどのようなものだったのか、考察する手がかりとなる。

(2) 平安時代の観音像と十地思想

奈良時代の平城京で確立した観音と十地の関係性は、九世紀にも引き継がれた可能性がある。二(一)で触れたように、安祥寺には銀製の不空羼索観音像と毘盧遮那如来像が安置されていた。安祥寺は、嘉祥元年(八四八)、仁明天皇女御(文德天皇母)藤原順子の帰依を受けて、恵運によって創建された。銀製の毘盧遮那如来像と不空羼索観音像を安置することは、東大寺法華堂や千手堂での十地思想から影響を受けた可能性が考えられる。

『華嚴経』教主である毘盧遮那如来は、密教における大日如来の原型であるという理解は既に広く知られていることだが、『大毘盧遮那成仏神変加持経』(『大日経』)においても「所謂初発心。乃至十地次第此生満足。」⁽⁷⁸⁾と、十地への到達について言及されている。密教における千手観音に対する理解は『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌経』に見ることができる。『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌経』は不空訳とされているが、冒頭に「我依瑜伽金剛頂経。説蓮華部千手千眼観自在菩薩身口意金剛秘密修行法。」⁽⁷⁹⁾とあることから、不空自身が『金剛頂経』に基づいて執筆した可能性があるとされている。⁽⁸⁰⁾空海の『御请来目録』と『真言宗所学経律論目録』記載の「金剛頂瑜伽千手千眼観自在念誦法一卷」はこれに該当しており、本経が空海によって请来され、真言僧の学ぶところであつたことが分かる。

『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌経』は冒頭にあるように、『金剛頂経』によって千手観音を本尊とした身口意の金剛秘密修法の法を説くものである。上巻では「次結金剛縛印。即以前印十度外相又。作拳即成真言曰 唵嚩日囉二合滿駄 由結金剛縛印。瑜伽者速得十地満足」⁽⁸¹⁾と、真言を唱えることにより、速やかに十地へ到達できるとする。下巻では「次結智波羅蜜菩薩印。二手外相又作拳檀慧直豎。互交少分。屈進力頭相拄令円。忍願直豎頭相合。即誦真言曰 唵麼麼積孃二合引曩迦哩吽引娑嚩二合賀 由結此印誦真言三遍。(中略)不久満足十地。住法雲地為大法師」⁽⁸²⁾とある。「法雲地」とは『華嚴経』における第十地の名称であり、本経での「十地」がまさしく『華嚴経』における十地であることは間違いない。あるいは、修法の種々の功德を説く儀軌後半においては「獲得初地百法明門」⁽⁸³⁾とある。

このように、十地への到達については、空海请来の密教經典においてもしばしば言及されていたことであつた。奈良時代平城京の十地思想が密教に受け継がれていた場合、安祥寺での造像がこの思想に基づいたとしても不思議ではない。安祥寺での盧舎那仏・不空羼索観音像の制作事情を明らかにするためには、奈良時代における十地思想や千手観音信仰が九世紀の真言密教にどのように形を変えて受け継がれたのかという検討も今後必要となってくる。

安祥寺のように、真言寺院で盧舎那仏像と不空羼索観音像を制作

した例もある一方、広隆寺でも不空羼索観音像と千手観音像が制作されていた。制作年代は千手観音像の方が不空羼索観音像に比べて降ると見られるが、両像とも『広隆寺資財校替実録帳』（寛平二年頃成立）に記載されている。不空羼索観音像と千手観音像という組み合わせは、大安寺華嚴院の不空羼索・千手観音・盧舍那仏を思い起こさせるが、広隆寺には盧舍那仏や釈迦如来の像は九世紀時点において安置されていない。広隆寺が本当に十地思想と関係していたのか、さらに多くの作例や文字史料を検証していく必要がある。

おわりに

本稿では、これまであまり言及されることのなかった千手観音と十地の関係性について、改めて現存作例や史料をもとに検証した。その結果、十地の菩薩を導くという、不空羼索観音と同様の役割を果たすという理解が、平城京においては千手観音に対しても行われていたという結論が導かれた。しかし、奈良時代の千手観音と十地の関係性が、平城京の外においてどのように分布していたのか、あるいはどのようなように九世紀に引き継がれたか、本稿ではいまだ解決できなかった問題も多い。これらの問題を解決することで、未解決な謎の多い千手観音信仰の解明へと繋げていきたい。

【注】

- (1) 『千手千眼陀羅尼経残卷（天平十三年七月十五日玄昉願経）』奥書『寧楽遺文』六一八頁
- (2) 東大寺上院地区に関する主な研究は、福山敏男「奈良朝に於ける写経所の研究」（『史学雑誌』四十三―四十二、一九三二年）、堀池春峰「金鐘寺私考」（『南都仏教』二、一九五五年五月）、栄原永遠男「福寿寺大般若経について」（『日本歴史』四五〇、一九八五年十一月）、吉川真司「東大寺の古層―東大寺丸山西遺跡考―」（『南都仏教』七十八、二〇〇〇年二月）、上原真人「東大寺法華堂の創建―大養徳国金光明寺説の再評価―」（『考古学の学際的研究―濱田青陵賞受賞者記念論文集Ⅰ―』昭和堂、二〇〇一年十月）、高橋照彦「東大寺前身寺院に関する試論」（『鹿園雑集』五、二〇〇三年三月）など。
- (3) 『日本上代における仏像の荘嚴』研究成果報告書 中野敬子氏作 図トレース図（奈良国立博物館、二〇〇三年三月）
- (4) 蓮華藏世界における菩薩の上昇については、長岡龍作「蓮華藏世界と観音―草創期東大寺の観音像」（『ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集』十、二〇一二年十二月）を参考にした。
- (5) 稲本泰生「東大寺二月堂本尊光背圖像考―大仏蓮弁線刻図を参照して」（『鹿苑雑集』六、二〇〇四年三月）
- (6) 真田尊光「唐招提寺創建当初の戒壇と現金堂盧舍那仏像について」（『南都仏教』八十七、二〇〇六年十二月）
- (7) 前園実知雄「考古学から見た唐招提寺の創建と金堂の建立」（『佛教藝術』二八一、二〇〇五年七月）
- (8) 奥健夫「唐招提寺盧舍那仏像の瞳と掌への特異な工作について」（『仏教彫像の制作と受容―平安時代を中心に』中央公論美術出版、

二〇一九年六月)

- (9) 安藤更生『鑑真』新装版(吉川弘文館、一九八九年二月)
- (10) 『大正新脩大藏經』五十一、九九三頁 a 六、a 七
- (11) 小林太市郎「奈良朝の千手観音」(『佛教藝術』二十五、一九五五年六月)
- (12) 『大正新脩大藏經』五十一、九九四頁 b 十一、b 十二
- (13) 石田瑞麿「鑑真―その戒律思想―」(大蔵出版、一九七四年一月)、井上一稔「鑑真和上像をめぐって」(『文化史学』五十五号、一九九九年十一月)、眞田尊光「鑑真と唐招提寺の研究」(吉川弘文館、二〇二一年三月)
- (14) 福山敏男「奈良朝の東大寺」(高桐書院、一九四七年一月)
- (15) 天平十七年八月二十五日「種々收納錢注文」(『大日本古文書』二、十四、三一六頁)
- (16) 堀池春峰氏前掲註?
- (17) 天平十六年十二月「金光明寺造物所解」(『大日本古文書』二、三八七、三八八頁)
- 金光明寺造物所解 申奉請経事
華嚴經一部 六十卷
- 右、依少尼公去天平十六年十二月四日宣、付秦麻呂奉請内已訖、又一部 八十卷
- 右、依少尼公同月廿五日宣、付秦広繩奉請已訖
以前、為今講說件経切要、仍
被良弁大德宣、為今講說、件経充可奉、
右為今請者依宣差舍人原且奉請、早速申奉令奉請、謹解、
- (18) 児島大輔「東大寺千手堂銀造盧舍那仏像と良弁による上院地区の再編」『美術史研究』四十二、二〇〇四年十二月、児島大輔「白

銀の転生―銀仏の造像と銀器の転用―」(『東大寺の研究三 東大寺の思想と文化』法蔵館、二〇一八年三月)

- (19) 福山敏男「大安寺及び元興寺の平城京への移建の年代」(『史蹟名勝天然紀念物』十一―三、一九三六年三月)、福山敏男「大安寺花嚴院と宇治花嚴院」(『建築史』一―二、一九三九年三月)、堀池春峰「華嚴経講説よりみた良弁と審祥」(『南都仏教』三十一、一九七三年十二月)
- (20) 天平感宝元年閏五月十日「進送大安寺華嚴紙注文」(『大日本古文書』十、六五七、六五八頁)
- (21) 天平感宝元年閏五月二十八日「東大寺写経所牒」(『大日本古文書』十、六六二頁)
- (22) 天平感宝元年閏五月十三日「東大寺裝潢所紙進送文」(『大日本古文書』二十四、五九六頁)
- (23) 天平勝宝元年閏五月十一日「大安寺造仏所解」(『大日本古文書』三、二二七、二八頁)
- (24) 「天平廿年八月以来上日帳」(『大日本古文書』十、三四〇頁)
- (25) 「天平廿年八月以来上日帳」(『大日本古文書』十、三四〇頁)
- (26) 「東大寺要録」卷第四諸院章第四附神社 所引用「弘法大師御遺告」(『続々群書類従』第十一宗教部六十九頁)
- (27) 池田源太「岩淵寺勤操と平安佛教」(『南都仏教』五、一九五八年十月)
- (28) 田中重久「道長の銀仏造蹟・修理と四天王寺の銀光背」(『古代史』十三、一九六七年三月)
- (29) 『大正新脩大藏經』二十、二九九頁 c 十八、c 二十
- (30) 長岡龍作「受戒と仏像」(『コレクションアーカイヴ―東アジア美術研究の可能性』勉誠社、二〇二二年十二月)

- なお浅井和春氏は、『不空羼索神変真言経』に「如法图画不空羼索観世音菩薩。如大自在天首戴宝冠。冠有化阿弥陀仏。被鹿皮衣。七宝衣服珠璣鑽釧。種種莊嚴執持器杖。」(『大正新脩大藏経』二二、二二二頁 b 五、b 八)と、大自在天の姿に似る要素の一つとして阿弥陀の化仏をいただくことが記されていることから、宝冠化仏の尊格を盧舎那仏ではなく阿弥陀如来と比定した。浅井和春、寧楽仏教」(『図説日本の仏教』一「奈良仏教」、新潮社、一九八九年三月)、浅井和春「法華堂不空羼索観音像の成立」(『日本美術全集』四「東大寺と平城京」、講談社、一九九〇年六月)、浅井和春「不空羼索・准胝観音像」(『日本の美術』三八二、一九九八年三月)よって法華堂像の化仏の尊格が阿弥陀如来である可能性もあるが、本稿では銀製という点を重視し盧舎那仏の化身としての釈迦如来であると考えた。
- (31) 浅井和春氏前掲註30
- (32) 長岡龍作氏前掲註4
- (33) 『資財帳』で「毘盧遮那如来像・不空羼索観音像・釈迦如来像二軀・脇侍像二軀」と記述しているものに対し、「已上六仏」と記述するのは、釈迦如来像二軀に対して脇侍像がそれぞれ二軀置かれたという意味だと考えられる。
- (34) 『千手千眼観世音菩薩広大円満無碍大悲心陀羅尼経』(『大正新脩大藏経』二一、一〇七頁 c 二六、一〇八頁 a 三)
- (35) 『千手千眼観世音菩薩広大円満無碍大悲心陀羅尼経』(『大正新脩大藏経』二一、一〇六頁 b 二十)
- (36) 「須陀洹」「斯陀含」「阿那含」はサンスクリット語やパーリ語に即した読み方であり、漢訳経典ではそれぞれ「預流」「二來」「不還」と呼ばれる。『大般若波羅蜜多経』三(『大正新脩大藏経』五
- 十四頁 a 四、a 六)或住解脱見蘊。或住預流果。或住一來果。或住不還果。或住阿羅漢果。』
- (37) ここまで記した『千手経』の内容は、伊藤丈「七観音」(『経典集』(大法輪閣、一九九六年十月)を参考にした。
- (38) 長岡龍作氏前掲註4
- (39) 慧沼訳「十一面神呪心経義疏」は『大日本古文书』では天平十六年八月二十九日付の「律論疏集伝等本收納并返送帳」の書写記録(巻第八、一九一頁)が史料上の初見である。
- (40) 彌永信美「観音変容譚 仏教神話学Ⅱ」(法藏館、二〇〇二年七月)、稲本泰生氏前掲註5、佐久間留理子「観音菩薩 変幻自在な姿をとる救済者」(春秋社、二〇一五年十月)
- (41) 「十二面神呪心経義疏」(『大正新脩大藏経』三十九、一〇〇四頁 c 二三、c 二五)
- (42) 『東大寺要録』八「雑事集」十二之二所収「大仏殿西曼荼羅左右縁銘文」(『続々群書類従』十二)
- (43) 長岡龍作氏前掲註4
- (44) 堀池春峰氏前掲註19
- (45) 玄蕃寮とは、令制で治部省に属し外国人の送迎接待や僧尼の名籍等を取り扱った役所であり、玄蕃頭はその長官を指す。(『日本国語大辞典』)
- (46) 『大正新脩大藏経』五十一、九九四頁 b 十一、b 十二
- (47) 石田瑞曆氏、井上二稔氏、眞田尊光氏前掲註13
- (48) 藤田経世「校刊美術史料」「寺院篇」上巻五十七頁(中央公論美術出版、一九七二年三月)
- (49) 長岡龍作氏前掲註4
- (50) 奥健夫「東大寺法華堂諸尊像の再検討」(『東大寺の新研究』一「東

- 大寺の美術と考古」、法蔵館、二〇一六年三月)
- (51) 児島大輔氏前掲註18
- (52) 児島大輔氏前掲註18
- (53) 丸山士郎「葛井寺の千手観音菩薩像」(特別展図録『仁和寺と御室派のみほとけ―天平と真言密教の名宝―』東京国立博物館、二〇一八年一月)
- (54) 近藤暁子「葛井寺千手観音菩薩像小考―その制作事情に関して―」(『美術史学』二十、一九九九年十一月)
- (55) 松田誠一郎「八世紀の胸飾における伝統の形成と新様の需要について(上)(下)」(『MUSEUM』四二二・四二三、一九八六年五月・六月)なお松田氏は、葛井寺像の制作時期は鑑真来朝以後であると指摘している。
- (56) 松田誠一郎氏前掲註55
- (57) 丸尾彰三郎「殊勝の千手観音―葛井寺本尊像―」(『大和文華』二十、一九五六年六月)
- (58) 山岸公基「盛唐の千手観音彫像と葛井寺千手観音像」(『佛教藝術』二六二、二〇〇二年五月)にて、盛唐と中唐の千手観音像十体の概要が述べられている。
- (59) 松浦正昭「法華堂天平美術新論」(『南都仏教』八十二、二〇〇二年十二月)
- (60) 山岸公基氏前掲註58
- (61) 近藤暁子氏前掲註54
- (62) 伊東史朗「道成寺の仏像 附道成寺縁起と安珍清姫像」(『古寺巡礼道成寺の仏たちと「縁起絵巻」』東京美術、二〇一四年九月)
- (63) 水野正好「道成寺の発掘調査」(『佛教藝術』一四二、一九八三年五月)
- (64) 西川杏太郎「大谷磨崖仏の沿革と現状」(『特別史蹟重要文化財大谷磨崖仏保存修理報告書』大谷寺、一九六五年三月)
- (65) 鷲塚泰光「石仏」(『日本の美術』一四七、一九七八年八月)
- (66) 北口英雄「大谷磨崖仏と石心塑像」(『栃木県の仏像・神像・仮面』、二〇一九年八月)、大澤伸啓・大澤優子「大谷磨崖仏と山寺」(『季刊考古学』一五六、雄山閣、二〇二一年八月)
- (67) 『続群書類従』第二十八上釈家部、一二八―一三二頁
なお『捕陀落山建立修行日記』には、勝道が中禅寺(現在の日光山輪王寺)に丈六の千手観音像を安置したことなども記載されている。
- (68) 深沢麻里沙「大谷寺と下野薬師寺」(『開館四十周年記念特別企画展 鑑真和上と下野薬師寺 天下三戒壇でつながる信仰の場』栃木県立博物館、二〇二二年九月)
- (69) 『国史大系』二〇二頁
- (70) 『国史大系』五九六頁
- (71) 長岡龍作「仏像―祈りと風景―」(『敬文舎』、二〇一四年一月)
- (72) 達日出典「奈良朝山岳寺院の研究」(名著出版、一九九一年二月)
- (73) ただし、人形浄瑠璃や「壺阪寺靈驗記」に見られる眼病封じの説話は、長仁の説話とは全く異なる内容となっている。
- (74) 「若為眼闇無光明者。当於日精摩尼手。」(『大正新脩大藏經』二十、一一頁 a 十一、a 十二)
- (75) 『続群書類従』第二十八上釈家部『寺門高僧記』七十二頁
- (76) 奥健夫「東大寺法華堂八角二重壇小考」(『佛教藝術』三〇六、二〇〇九年九月)
- (77) 浅井和春氏は、不空絹索観音像と執金剛神像が一具として安置されたと考えた。(浅井和春氏前掲註30)

- (78) 『大正新脩大藏經』十八、一頁b四～b五
(79) 『大正新脩大藏經』二十、七十二頁a十～a十一
(80) 鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行『大藏經全解説大事典』
(81) 『大正新脩大藏經』二十、七十三頁b八～b十一
(82) 『大正新脩大藏經』二十、七十八頁b十九～b二十九
(83) 『大正新脩大藏經』二十、八十二頁a十六

【挿図出典】

- 図1 『お水取り』展図録(奈良国立博物館、二〇二二年二月)
図2 『日本上代における仏像の荘嚴』研究成果報告書 中野敬子氏
作図トレース図(奈良国立博物館、二〇〇三年三月)
図3 『魅惑の仏像』二「千手観音 奈良・唐招提寺金堂」(毎日新聞社、一九八六年四月)
図4 『名宝日本の美術』四「東大寺」(小学館、一九九〇年七月)
図5 『仁和寺と御室派のみほとけ―天平と真言密教の名宝―』展図録(東京国立博物館、二〇一八年一月)
図6 『道成寺と日高川―道成寺縁起と流域の宗教文化―』展図録(和歌山県立博物館、二〇一七年十月)
図7 『日本の美術』一四七「石仏」(至文堂、一九七八年八月)

【付記】

本稿は、令和三年度に東北大学文学研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正したものです。本稿の執筆にあたり、東北大学文学研究科の長岡龍作教授、杉本欣久准教授よりご指導を賜りました。また東北大学文学部東洋・日本美術史研究室の皆さまには、多くのご助言を

賜りました。末筆ながら、心より御礼申し上げます。

which belongs to the Shingon Sect. There is a strong possibility that Ten Places philosophy in the Nara period was inherited by Esoteric Buddhism. In the future, it will be a challenge to clarify in what form the Nara period Shingon Esoteric Buddhism of the 9th century inherited the Thousand-armed Kannon.

Summary

Sculptures and Roles of Thousand-armed Kannon Bosatsu in the Nara Period: Focusing on the case of Heijokyo

Yuki YANAI

There are few extant examples of Nara period statues of the Thousand-armed Kannon, and the actual nature of the belief in this deity is still unknown. This paper focuses on the existing examples of the Thousand-Armed Kannon in Heijokyo during the Nara period, as well as examples of its creation in historical documents, and analyzes the background and roles of each. Furthermore, this article aims to clarify what role was expected of the Thousand-Armed Kannon in the context of the historical background of Japan during the Nara period.

In the first section, this paper summarizes existing examples of the statue and historical examples of its creation in two sections in order to clarify the background of the production of the Thousand-Armed Kannon in Heijokyo during the Nara period.

In the second section, this article examines the possibility that the Thousand-Armed Kannon was asked to play the role of guiding the bodhisattvas of the Ten Places by examining the two characteristics this paper has focused on in the first section, namely, its relationship with silver statues of Buddha and the fact that it was often placed together with statues of Rushanabutsu or Shakyamuni Nyorai.

Summarizing this study up to this point, this paper concludes that statues of the Thousand-armed Kannon Bosa-tsu in the temples of Heijokyo show a relationship with Rushanabutsu and were expected to play a role in guiding the Ten States of the Flower Garland Sutra. Next, this article summarizes the examples of statue making listed in the previous chapters in chronological about understanding of the relationship between the Thousand-armed Kannon and the Flower Garland Sutra. On the other hand, this article could not find any relationship with the idea of the Flower Garland Sutra in the statues of the Thousand-armed Kannon outside of Heijokyo.

Finally, this paper mentions the possibility that part of the relationship between the Kannon and the Ten States of the Flower Garland Sutra established in Heijokyo in the Nara period was carried over into the 9th century. As mentioned in second section, there was a silver statue of Vairocana Buddha enshrined at Anshoji-temple,